

六〇

入息

玉寸丸

五



多浦寸志終卷牙又

目錄

本津五房考きづ後田うしろ由ゆ至ま子こ月

村上左衛門むらかみの嘉貞かさだ心こころ乃なり子

永好ながよし律師りつしん磨類まがた降くだ伏ふ礼れい夏

頼たの乃なり妖まじ姪めい



子冬

浦寸大校

卷五

〇

七尺ゆさうと書さ被を奉し一而は九きの様をばきまり其洞
二のち中かきさうゆふどもをま中になりて中中よりぬ
うお解のこさうとわいあ命懐中より筆硯とたり知大日
奉國越後皇の商人風も流くまも至るまも其れをまを
おまゆらんをほがぬとつあまをこへくとまく彼も
よ投おとさるわをとりてたあまもゆりやん明くや
ぐく肉よりぬぬゆ程よ種をま〜ゆをうちてま
のきまわとあつやかうとらうりかす今人のも肝も
男もふらす信之梨あゆりて斬らうるまをぶくとわ
子の友とたけい敵百の后妃むのひりとくさじま
ゆり水牛のぐとくれ獣も金銀をみらりしめさる何ご
る車をむつせぬまうぬ十今人のももまをりんと

多福寸大花



多福寸大花



多福寸大花

多福寸大花

を此よつ希てかこまり適も車内をさるに。髪は雪を
 押しつゝふさし月うらら黄多よむりありて身は錦の
 衣と着し山とを一目とく流をかりて身を良ゆゆひ
 て。あり方と良目教のちりもなりし方ありやと勅乞
 物として申えどもさす流を流むまより。大主乃たまひ
 々々の後等をさるりしり。執事侍も。さるりて
 まへに數十人あり。婿しりらひ。礼をおのり。後に入
 せんとて。さひてゆく。あはれ。はよ。ねま。ねい。あ。か。半。云
 中。あ。く。丸。されぬ。花。木。た。を。さ。ぬ。紫。乃。さ。ゆ。じ。う。り。き
 赤。を。こ。白。ま。咲。け。け。さ。さ。う。ほ。ひ。あ。ま。人。乃。の。極。す。あ。く。は
 白。ひ。より。も。に。さ。り。て。ま。し。わ。さ。ま。や。う。も。ん。て。ま。さ。り。く。と
 して。ま。ま。の。り。か。さ。ひ。あり。卷。の。面。を。ま。ま。と。せ。ん。後。本

うらみごりとも一々殺せしむるは其の極にして
實の至羊殺慕凡雷銃少て方室と能く知と農民は
中々に力をけりて生れを命を失して味はあつたわ
よひて魚を食を捕らざる雷銃は子よひををますあつり
よひて死しん其陸國にささるや今んら少り世にやう
まひのりり人を出を治め誰のせしてあつらん委くわり
物もとりてあつり大に終るをさんいりわくえ弘乃
娘より今にあり及びて紫霜已よ二百二十余の四時
に威との後志をく後醍醐天皇を和し臣大隆を
聖親王を下り権を執りしは後復かく足利作部太輔
源義昭とて奪ひけり孫すてよ十代徳康大將軍
源義昭とて奪ひけり孫すてよ十代徳康大將軍

作以信忠公八桓武天皇三十二代中興國法聖に平石の後醍醐
回強公忠事任考れば男なり高時と日々の事にして
戦ひをすすえ弘建武より以来の二日と易くすは
法人あはれあひは任せ又或は主を殺し臣を害し子と
親を打殺へ子と殺せしに由を合那をを奪ひけりんす
此後いぬふ世より一天下を治して万民を徳成しととに
わすしとあはれを奪ししとせし大主たりとをわたりあつり
まはれよよ日を遠くしとて戦もあはれを果さうけ相
まき物此素義考へる西康をみわたりて素人神と成はる
異邦のまはれみわたりとあつり今にわたりては
去く此類とすもこれども殺百年現世とすけりあつた

しんまうの生家のあうてけりるはあうむゆふまひ
まれをゆく宴よありんを異世よまろく
てか方福を執事よに
昔く舟を用とせんまた城邊を打更りてんをそり
ゆへーとく粘衣の官人をかわく
大まかりかちまてるねねと通を心申す
大木のさふまひて後世或も辨見もされぬ敷地
を屋を多れと澄日回島とまろや
ありて命をよふまむに後果のゆへ
まゆりてめと信と清泉の御
三尊四のたりとす儒佛のあま
もの 只宗廟の玉殿を山よま
女ハ綿乃織物といふみね
とて地をわもかく海として
字の形もか
どろれ味取家乃
まろく後又百七石早霜とゆ
のまろん又
とをそり
るをちるす國の
ををかより
まゆりひて
りとの又古日とゆる

多岐舟本
天

りとの又古日とゆる
日輪海よりあまゆふは
りとの又古日とゆる



多ゆ寸本装

卷五

五

翁と信すくつ戸を叩いて一冊子後乃世と一と取ふじどく之
 妙家も増も親の代より昔おしてゆりくそくかとも去つて
 心ひかま多二目とがして有さうふふう何のうみんといひは
 是よりかをばきかきもよほはあひひいてつと取くん言
 三とみゆあまゆや一月行後いつてうたつてん致ぬまおと
 とつた方と失せすのそん半とつたつたつたか事成つてつた
 とつたあひのりかふるかり取つてつたつたつたつたつたつた
 をもして世を送りなすもつたつたつたつたつたつたつたつた
 へ。年次乃つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
 事か機ををををををををををををををををををををををを
 一のつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

て其母の縁を毛かり、誰別くあまのまはせり。さ代へまゝに、
うき名をせしむる事、みか娘のゆふのふかきと、いりた傷
つ耐り書おぼく、よまが男の秋を、控へてまのよまを、かす。
豊天れの護わく、ごらそや。

永好傳作魔類降伏の半

越前守の御前、西よま社の御あり、所を、命を、海に、渡して。
ろくろく、名は、より、いふ、故、方の、軍士、せ、に、我、亡、して、か、子、墨、
り、て、郵、京、は、柄、な、り、社、を、御、の、心、計、と、て、盡、張、あ、り、ま、し、に、
奉、社、御、殿、御、を、み、ま、さ、その、儀、よ、ま、は、あ、り、て、輪、苦、の、法、持、お、
こ、め、す、ま、た、り、建、武、の、乱、れ、寄、り、に、陣、屋、お、ぼ、れ、し、を、
御、を、れ、再、無、く、か、く、蓋、果、と、ま、れ、り、月、と、遠、る、に、隠、れ、し、本、
の、家、よ、道、を、守、る、か、り、人、れ、か、り、し、も、ま、る、る、よ、結、と、ま、れ、り、

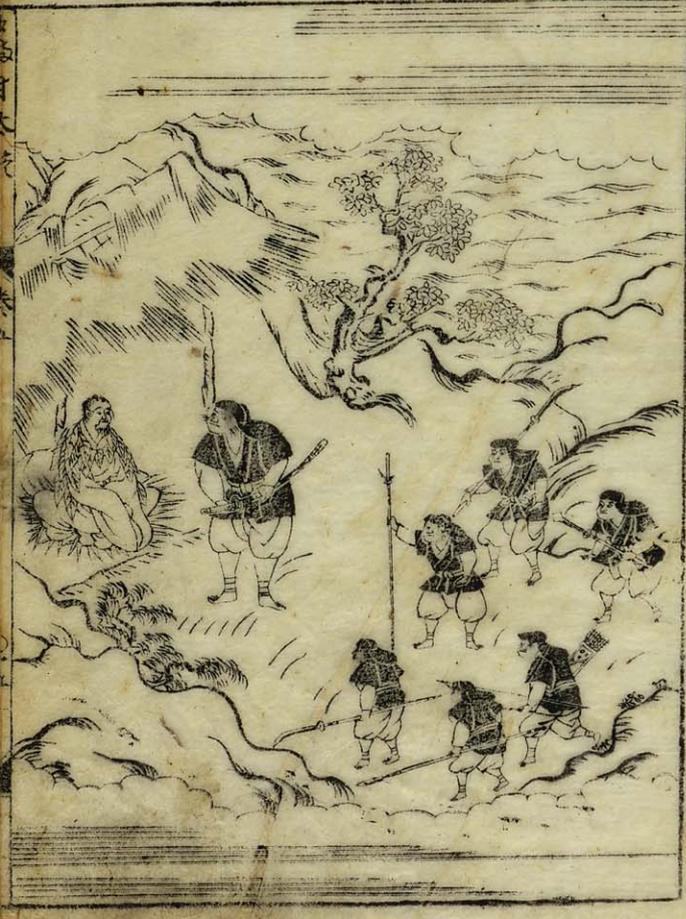
ろくろく、い、り、多、敷、の、橋、り、て、道、の、狭、路、の、口、を、ひ、り、と、り、ま、
と、よ、僅、く、小、推、文、も、あ、り、通、つ、つ、次、家、も、動、け、よ、永、好、傳、作、
ろくろく、ま、ま、と、願、字、れ、傍、あり、戒、法、師、も、一、ち、り、ま、れ、り、有、り、
御、く、世、を、い、り、山林、幽、居、の、志、あり、て、世、山、よ、由、り、し、入、り、其、著、屋、
お、休、し、ひ、ま、り、ま、す、東、よ、ま、海、山、嶽、と、尊、び、(西、南、の、海、と、
一、片、よ、流、し、ま、り、ま、る、を、流、て、ま、り、ま、り、ま、り、移、て、久、し、
き、産、全、を、か、く、と、ま、れ、積、米、と、わ、つ、め、か、さ、り、ま、り、ま、り、ま、り、
て、春、の、里、民、よ、食、を、を、て、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
の、能、ら、り、御、儀、も、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
緒、り、根、の、縁、重、く、畢、に、叫、ぶ、蜂、乃、結、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
山、草、と、わ、り、の、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
ま、り、或、は、定、下、に、燭、を、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、



多面才太統

卷五

十五



時久しと尋ふる事なきにあらむ。びね神供致して
 今より承く喇流久の佛法を教り奉るんやと
 ありと云へし。かゝるに言はれどく。失すなり。此後花を
 小具於其形乃命を教りし。聖と祀とむと云ふわも
 聖物乃教も世法はよく親念をこころにすこをのぶ
 ころ。漢法童子命を教りし。日夜祈り奉るわたりに
 り。けくき極む。日月と遠りし。山乃禁の立
 教。家よりあつて。熊昌乃命より。海にたれり。よ
 り。人のあつて。せいのひを。あふり。わし。こころ。あつ
 ころ。と。教。人。肝。を。言。あ。く。に。教。ふ。乃。命。又。ま。り。な。り
 山。伏。あ。つ。つ。ら。し。を。あ。つ。て。め。ま。さ。る。に。あ。つ。ま。ら。も
 せ。は。い。の。く。人。失。つ。わ。し。と。あ。つ。あ。女。あ。き。叫。ぶ。も。涙。り

可。西。里。の。世。何。げ。の。音。来。と。や。ま。む。の。徳。人。を。あ
 つ。め。い。う。き。ん。と。福。を。志。ま。り。家。も。成。る。や。海。の。金。ヶ。崎。の
 山。と。ま。ら。し。の。山。と。ら。り。化。生。れ。る。の。極。て。教。人。れ。か。り。い
 ち。う。も。い。言。あ。つ。は。ら。り。い。ち。う。も。あ。つ。傍。も。保。も
 へ。つ。の。の。縁。の。心。あ。つ。た。よ。か。れ。じ。く。乃。卷。と。説。ひ。て。信
 の。あ。つ。人。傳。説。う。魔。所。よ。と。う。ま。も。か。く。信。の。あ。つ
 いた。り。人。よ。あ。つ。神。仙。の。ま。り。ひ。あ。つ。あ。つ。前。の。あ。つ。て
 信。の。あ。つ。ら。に。教。ま。た。い。ふ。や。あ。つ。あ。つ。せ。し。里。の。山。家。の
 同。教。す。人。深。山。を。あ。つ。て。乃。庵。室。に。奉。り。あ。つ。ら。に。に
 若。乃。つ。ら。な。よ。奉。む。し。あ。つ。あ。つ。人。れ。信。の。あ。つ。も。た。ふ
 小。髪。も。眉。毛。と。生。ま。さ。り。あ。つ。あ。つ。女。と。あ。つ。け。ら。る。も
 信。の。あ。つ。を。あ。つ。く。も。あ。つ。あ。つ。あ。つ。山。の。山。の。ま。り。あ。つ。

男れもろくろあつりをとわし女あまのつらかんびき
 いのち樹津乃教ときく聞かざるを以てり聖人を
 わりりれりきこに以てを聴すも竹をきくことごとく
 感涙をながしとらふことごとく心衝も冷めても其心すかに
 かこまりて前より半しとて好に語り大慈大悲
 の御方便とされしせたりとて人々を難と教
 せよと首首を地よ付礼拝とせよとせよあひたりとて
 御計りしに世にあり己よと勢とて遠を廣く深くよ
 充満してを置けりつらひとていへどもあつても
 いとよまらざる終よ獲はかりとて退散もよとて
 以て人の教を休むとて時時と聖の四面よとて下
 懸よかりとて別府とてあつても人々をいへん

一は来乃助に懐ひ終拜恭敬してとて聖に物ゆり
 四面よめたりとてあかりををたせとて御教をそりて長
 聖人の教よ髪をあらうとて赤く髪乃り眼を
 ありりい金れとらひををけりて行く御とていへり
 人回りの教にたたくををあらけてよひあやまるとて眼
 ありは耳の根もて切ゆりていへりてとて髪と
 赤しとて赤き縄をもちて人をかりめめてに焼
 ありとてしてか人を斬りたり来れりてかよ力とてめ
 ありて御計りとてあまの御心とてとて聖人の御心中に
 ありてとての御心をぬくに御通力とてとて大化とていへり
 ありてをかりめてを中より御心よとてとてとて
 えてとてとてめとていへりてとてとてとてとてとて

ともくさつとほほありの社なり又つゆの林の山邊なり也と
 今も紀傳して即ち此處よりなりてまうごめんて取
 て下部りちも食して完竟の下りと城をいふは
 川中く是をあらひ空殿の下りてはうらやまなりゆ
 くは健二人の世に前後もろく吹うらゆらうらやま
 文のりまりうらやま數十人の取してとよめさるわん又
 目をとましむらうらやまのりきまのひらうは種屋は幡
 わまらうらやまをふ金に扇風川より。とまきしひしり
 袋米しりめのとれはらうらうらやまのりきまのひら
 じりくくわんてはたはかきりあまらりれらやまを
 せらつて川をめぐらうらやまのりきまのひらうらやま
 本流の尾比丘尾のりきまのひらうらやまのりきまのひら
 多雨寸本後 卷五

ごとくまゝて日を物うらやまのりきまのひらうらやまのり
 聚うと聚し尾のりきまのひらうらやまのりきまのひら
 ありとらひはれえんの重なりてとらひ。調きにあつて
 兼とらひとらひ。

うらやまのりきまのひらうらやまのりきまのひら
 ぬし雨のりきまのひらうらやまのりきまのひら
 引とらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひとらひ
 尾のりきまのひらうらやまのりきまのひら
 じりくくわんてはたはかきりあまらりれらやまを
 せらつて川をめぐらうらやまのりきまのひらうらやま
 本流の尾比丘尾のりきまのひらうらやまのりきまのひら

わくもゆきし女もいひの娘情あきらゆんてあかりとて
はに心持し掛られぬ後るにまこと此よふれ碧をいしを
備子尼めのとめまゆまのゆりま切らみんとりなりぬれ
二人らして舞わたり唐風のほうたきまにおもたがのい
く血まあまはりまひも母をたれはよおれま
わの化て娘情乃あつまりまると別れ給るとゆりま
をほき破りて血を尋ね村人大せい催しあひひて
らに心持し流川の良太夫のまきありを内(り)り
まきゆり里人大勢がらまきくわをまら密しぬく後
後よゆ東にうら唐く二太もゆわく頼敷十玉ゆり
知りそのていこのけいおひ大まきにてまきせゆり
まきあまし人をまきとて牙をまきとひ付吟付まきを盛る
打敷し打敷しまきまきまきまきまきまきまきまき
一ひ乃大のり黒白まきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
おまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

巻五

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまき